
ウィッチーズと独りきりのウィザード

八九寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィッチーズと独りきりのウィザード

【Nコード】

N5045Z

【作者名】

八九寺

【あらすじ】

ストライクウィッチーズの世界にオリ主がやってくるお話です。本作は私が本サイトに投稿している『魔法少女リリカルなのは 若草色の妖精』の主人公「ジーク・アントワーク」の数年後の物語となっています。

本作品は、私のブログ「日々遊々」で連載されていたものに加筆修正をくわえ転載したものです。その旨、ご了承ください。

プロローグ

Prologue

地球とよく似ているが魔力が存在するとある世界、1939年2月、突如世界各地に出没した正体・目的共に不明な異形の敵「ネウロイ」の圧倒的な戦力と瘴気の汚染による大陸侵略が進んでいた。

ネウロイは「瘴気」を撒き散らしながら進行するため、通常の間人では遠距離からの攻撃以外なす術がない。

大地を腐らせ金属を根こそぎ吸い尽くし、さらには金属や廃材などで兵器を生産、増殖を繰り返す。

侵略された土地は瘴気によって人が住めなくなるため、数々の国が滅ぼされた。

人類は唯一の希望として、魔道エンジンによる飛行脚「ストライカーユニット」を唯一駆ることの出来る魔力を持つ少女「魔女」による「ストライクウィッチーズ機械化航空歩兵」に望みを託しているのが現状だった。

その1年後の1940年2月、その世界に本来訪れるはずがなかった2人組の旅人が訪れた。

S i d e ・ C o n t r o l l e r

〔1940年2月18日カールスラント南部空軍基地〕

『本部より緊急通信です、シュトゥットガルト北部の町、カイザーベルグがネウロイの襲撃を受けています。ウィッチ隊は至急発進し、これを撃退してください。繰り返します——』

S i d e ・ S i e g

虹色に輝いているトンネルのようなものの中を1機のVF-171 EXカスタム 通称「ナイトメア?」が飛行していた。

そしてそのあまり広くなく、3人も入ったら身動きも出来ないような狭いコクピットの中に、1人の少年と、姿の见えない少女の声が響いていた。

少年の容姿は10代前半、身長は160cmくらいで、髪は烏羽色、長く伸ばした髪を後ろで括っていた。

「マスター、まもなく次の時空に到着します」

「了解。しかし今度の世界はどんな世界だろうね、イリア?」

少年は虚空に向かって語りかける。

「さあ？ 流石に着いてみなければ分かりません」

「それもそうだな、まあとりあえず平和な世界だと良いけど」

その言葉を聞いてイリアが少し棘のある声で返答する。

「そうですね、着いた時に何か起こっていたらマスターはまた危険なことだろうと介入するんでしょうから」

少年はそんな少女の声に含まれる怒りに対して、苦笑いしながら返す。

「そりやあ目の前で怪我をしていたり、よくわからない謎の生物に襲われてたりしていれば助けるのは当然じゃないか」

「やめてよ！ 危ないから！！ 見てるこっちの身になって！」

「いや、だって着いた場所で絶対何かが起こってるんだから仕方ないじゃない？ そのおかげで現地の人と知り合って仲良くなれたこともあったんだし、それになによりそのおかげでイリアにも出会えたんだから」

それを聞いてイリアのそれまでの口調が崩れた。

「……ジーク、そういうことを真顔で言わないでよ…恥ずかしいから…」

姿は見えないが、声から照れているのは一目瞭然だ。

「…何か恥ずかしいこと言ったか？」

「…分からないならそれでいいもん」

「なんで急に機嫌が悪くなる？ ……まあいいや、イリア、操縦中なんだから、公私を分けた話し方をしなさい。 ……まあそんなことだから、次の世界に着いた時もそれは変えないさ」

しづしづといった感じで、イリアが口調を戻す。

「はい、分かりました。コホン……マスター、あと30秒で到着します、何が起るのか分からないので護身用の武器くらい準備をしておいてください」

「了解、こっちはいつでも大丈夫だよ。イリアこそ準備の方は大丈夫？」

「いきなり戦場に到着したとしても大丈夫です」

毎回、到着していた先で問題に巻き込まれるのは日常茶飯事なので、対策は常に万全だ。

というか、その問題に巻き込まれる体質をどうにか出来ていたら、苦労は無い。

「……出来ればそうじゃないと良いんだけどね。」

行く先々で、問題に巻き込まれている自覚があるジークとしては、声に力がこもらない。

ジークの悲嘆をスルーして、イリアが到着までの秒読み>カウントダウン<を開始する。

「…到着までのカウントダウンを開始します、5…、4…、3…、2…、1…、ゼロ」

カウントダウンが『ゼロ』になったその瞬間、眼もくらむような白い光が一瞬だけジーク達の乗っている機体を包んだ。

「…無事到着しました。対閃光用遮光シャッターを解除します。……
っ！ ……これはっ…」

「…街が燃えている。一体何が…？」

コックピットの外に広がるのは、空襲を受けたかのように燃える街の光景。

時間は夜のはずなのに、燃え盛る炎で空が紅く染まっていた。

「…！！ ……マスター！ 2時の方向、距離2000に、街に攻撃を加えている飛行物体を確認しました。生命反応は見受けられないので無人機だと思われます」

「この地を守っている軍隊のようなものは確認できるか？」

ジーク自身も、コックピット内の機材を使用して、周囲の状況収集を開始する。

「いいえ、今現在確認できていません」

「……イリア、街の被害状況は？」

心の中での焦りは隠しながら、何処までも冷静に二人は現状を確認する。

「火の手が街の各地で上がっており、街の7割に延焼しています。また、逃げ遅れた人々が多数いるようです」

その言葉に、ジークは『ギリ……』と奥歯をかみ締める。

「……イリア、ナイトメア？の武装の使用を許可、その攻撃をしている飛行体を破壊または撃退する」

ジークの脳内によみがえる、自身の生まれ故郷の滅びていく姿。この場において、どちらが蹂躪する側とされる側、どちらが正しいのかなど、ジークにはわからない。

だが、目の前で命が消えていくのは許せなかった。

6年前、滅び行くことを止められなかった故郷を、ジークは未だに忘れられていない。

「……マスターは？」

黙り込んでしまった自身の主へあるじくを気遣うように、イリアが

声を上げる。

「ネメシスで外に出て救助活動を行う」

「…止めても無駄なんでしょうね。…外気に詳細不明の物質が混ざっています、…これは恐らく瘴気です。出る前に防護用の魔法を使用しておいてください。…ジーク、無事に帰って来てくれるよね？」

イリアの恐怖が混じった懇願。最後だけ、口調が普段のものに戻ってしまふ。

「…もちろん、情報ありがとう。…大丈夫、俺はちゃんと帰ってくる。…じゃ、行こうか」

「了解！」

そういうと、ジークは自らに防護用の魔法をかけ、キャノピーを開けると同時に空に飛び出したのだった。

プロローグ（後書き）

誤字脱字・原作との相違点などありましたらコメント欄にてご一報
いただけると幸いです。

第1話 救助 約束 戦闘開始！！

Side・Siege

「展開ッ！！」

ジークは外に飛び降りた瞬間に、腕時計によく似た魔法発動体を下に向けて、叫ぶ。

瞬間、発動体が発光し落下していく10mほど先に、長方形の光り輝く門>ゲート<が現れた。

ジークがその門>ゲート<を通り抜けた途端、服装が変わり背部に飛行補助ユニット『ネメシス』を装備した格好に様変わりする。

ジークの髪の色が烏羽色から白銀色に変わっており、眼の色も碧色に変わっていた。

発動体から、『Complete』と機械音声が小さく告げる。

同時にジークは加速して逃げ遅れている人のサーチを開始した。

「大丈夫ですか!!」

ジークは反応のあった一番近い場所に着くと、砂埃に塗まみくれてしまっているが、仕立てのよい背広を着た、怪我をしている壮年の男性を発見し声をかけた。

男性は火災の際に起こった爆発の際に飛んできたと思われる鉄パイプが腹部に刺さっていた。

「うう…、ウィッチ…か？」

男性が、閉じられていた眼を薄く開く。

顔には、迫る炎と痛みのせいか、汗がにじんでいた。

「? …通りすがりの魔法使いです。そんなことよりも治療を!!」

ジークは男である自分を見てウィッチ（魔女）かと聴かれたことに疑問を覚えるが、直ぐにそんなことは水に流し治療を開始する。

同時にジークたちの頭上で、大きな炸裂音が響く。

「!? …なんだ? 今の爆発音は？」

男性はまたどこかで何かが誘爆したのかとその音に過剰に反応した。

怪我をした体で、空を見回そうとする男性を、ジークは抑える。

「ああ、仲間が空の黒い飛行物体に攻撃を仕掛けた音だと思います。少し痛いですが我慢してください。……術式名『汝に光の加護と祝

福を』」

ジークが炸裂音の説明をしている間にも空から機関銃を撃つような音が聞こえてくる。

ジークは断りを入れた後に刺さっていた鉄パイプを抜くと、治癒魔法を発動した。発動すると、男性の体が光の薄い膜で包まれる。

男性のパイプが刺さっていたところに光が集まりだす。眼に見えて出血が止まり、ゆっくりとだが傷口はふさがり始めていた。

「……これでよし。このまま暫く安静にしてください、この膜は障壁の役割も果たしていますし、酸素も供給されているので救助が来るまでこの中で回復をしながら待つていてください」

ジークは男性を安心させるよう笑いかけながら伝える。

「そうか…わかった、そういえば君の名前は？」

こわばらせていた身体を弛緩させた男性が、ジークに名前を尋ねてくる。

「？ …ジーク・アントワークです」

戸惑いながらもジークは自分の名を名乗った。

「（…名前から判断すると間違なく男だな、…なのに魔法を使用している？）助けてもらったのにお礼をいってなかったな。ジーク君、助けてくれてどうもありがとう。おかげで命拾いしたよ。それより

君はこれからどうするんだい？」

内心で、疑問の声を上げた男性だったが、この場で問答してもしょうがないとわかっていたのか、ジークに礼を言うと、これからについて尋ねてきた。

そんな問いかけに、ジークは当然のように宣言する。

「自分は街を周り、貴方のような人を救助して周るつもりです」

「そうか……」

男はそう言くと、少しの間黙った後に、着ていた背広から名刺ケースを出し、その中の名刺を1枚ジークに手渡す。

「私はアルベルト・バウムガルトと言う者だ、命を助けてもらったのにこの状況ではお礼を言うことしか出来ない、此所>ここ<での戦いが終わったら正式に御礼をさせてくれないか？」

ジークは名刺を受け取ると、少し考え、口を開く。

「…分かりました、近いうちに伺わせてもらいます」

好意を遠慮するのも申し訳ない。ジークはそんな気持ちから男性に頷き返した。

「ありがとう、受付でその名刺を見せてくれればいい。来る日が決まったら連絡してくれるとありがたい。……ああ、それといま空で戦っている、君の仲間も一緒に」

「分かりました、アルベルトさん。じゃあ自分は他の怪我人を救助しに行ってきます」

ジークは再度頷くと、ネメシスのウイングを広げ、再び空へと飛んで行った。

S i d e . I r i a

ジークがアルベルトの治療を始める少し前、イリアの駆るナイトメア？も謎の飛行物体と接触した。

（飛行物体に接触するまで残り7秒、…マスターからの命令はこの飛行物体の破壊が撃退、しかし下手に破壊して墜落させてしまうと救助中のマスターに被害が及ぶ可能性がある。……ファイター形態で初撃を加えたのち、ガウオーク形態で周りを飛び回って攪乱しつつ砲口を破壊しつつ敵意をこちらに向けさせ、街から気を逸らさせましょう）

イリアは敵を観察しながら、戦術プランを構築する。この間実に0.2秒、イリアの優秀さが窺える。

……残りの6.8秒をこの戦いの後、ジークにどう甘えようか考えていなければならない……

（褒めてくれるかな？褒めてくれるよね！一緒にお菓子を作るのもいいけど、一緒に買い物に行くのもいいな。はっ！これってデートっ！？……どっちにしよう）

イリアの葛藤は接近を知らせる警告音が鳴るまで続く。

（え！ ちょ！？ いつの間にかこんな近くにつ！？……PPB」
ピンポイントバリア」展開、これより攻撃に移る。Target
lock on……Fire！！）

敵の接近にようやく気付くと、飛行体下部のビームを発射している赤い部分を可能な限りロックオンし、マイクロミサイルでの攻撃を行うと、すぐにガウオーク形態に変形して周りを飛び回り、機銃>ガンポッド<による攪乱目的の攻撃を開始した。

第1話 救助 約束 戦闘開始！！（後書き）

誤字脱字・原作との相違点などありましたらコメント欄にてご一報
いただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5045z/>

ウィッチーズと独りきりのウィザード

2011年12月18日09時50分発行